

## 稲 作

## 平成25年度 水稻作柄現地調査報告書

平成25年 9 月  
一般社団法人 北海道米麦改良協会

【調査月日】 平成25年 8 月26日(月)～28日(水)

## 【調査先】

- ◎道南班：当別町・蘭越町・道南農業試験場・北斗市・厚沢部町・今金町・厚真町・長沼町・中央農業試験場（水田農業 G）
- ◎道央・道北班：美唄市・新十津川町・深川市・沼田町・留萌市・小平町・士別市・上川農業試験場・旭川市・東川町・中富良野町  
（各市町のほ場は、現地奨決ほ場を中心に調査）

【参加人数】 約80名（部分参加含む）

【総合検討会】 平成25年 8 月28日(水) 空知農業会館 4階大会議室

本年度も標記調査の実施にあたり、道農政部・農業改良普及センター・道総研農業試験場・地区米麦改良協会等、関係機関の皆様にご協力・ご配慮をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

本調査で得られました各地区の作柄概況や総合検討会で纏められました、今後の収穫作業や次年度に向けた留意事項について、下記のとおりご報告致します。

つきましては、内容をご査収いただくとともに、今後の取り進めにあたって引き続き、ご配慮いただきたくよろしく申し上げます。



## 1. 各地区における作柄概況について

### 【道南地区】

- ・春先の低温寡照により、苗の生育や移植作業は平年より遅れたが、移植後は高温多照に転じ、初期分けつは旺盛に推移した。
- ・幼穂形成期から冷害危険期にかけての気温も確保されたことから生育は早まり、順調

に推移したが、7月下旬の寡照により出穂は緩慢となった。（出穂期は渡島・檜山とも早3日と6・7月の生育進度からペースダウンした。）

- ・初期の分けつが旺盛であったことから、莖数が、平年を大きく上回る時期もあったが、最終的な葉数・穂数は、地区・品種により異なるものの、概ね、平年並み～やや多い



程度となる見込みである。

- ・ 8月2半旬以降の気温が高く推移したことから、不稔は総じて少ない傾向にあり、また、病害虫の被害も少ないことから、平年作を上回る作柄が見込まれる。

#### 【後志地区】

- ・ は種期、移植期の平年より遅れたものの、6月以降の好天により、生育も早まり、出穂期は平年より6日早まった。
- ・ 7月下旬の日照不足により穂揃いが良くなく、早期異常出穂したほ場も目立っている。
- ・ 草丈・葉数は平年並で推移しているが、茎数は平年より多く（8/15現在、平年比120%）推移しており、穂数も同程度となっていることから、平年を上回る収量が見込まれる。
- ・ 穂揃いが不良なため、上にある穂は黄熟が進んでいるが、下の穂はまだ青い。このため、こまめな試し刈りが必要。



- ・ 地区全体としては、平年よりも早く生育が進み、9/9以降に成熟期を迎えるほ場が多くなると見込まれる。

#### 【日胆地区】

- ・ は種時期が遅れ、育苗期間中も低温で経過したが、移植時の苗質はほぼ平年並みを確保し、移植作業や活着期も大きく遅れることがなかった。
- ・ 移植後の生育は良好で、生育が早まるとともに、葉数・茎数もやや多く推移している。
- ・ 穂長は長く、穂数はやや多い生育状況となっており、また、高温で経過したことから、登熟は良好に推移し、平年より一週間程度早い生育進捗となっている。

#### 【石狩地区】

- ・ 融雪遅れにより、耕起作業・は種作業・移植作業が平年より大幅に遅れ、活着期で6日遅れ（北部地区）であった。
- ・ しかしながら、移植後の好天により、植え傷みは少なく、生育遅れは回復し、茎数も平年並～やや多い状態で経過している。
- ・ 平年より3日程度早い生育となっており、穂数・籾数は平年並みであるが、穂揃いがやや不良である。
- ・ 不稔は平年よりやや少ない見込みであるが、ほ場間で生育差がやや大きい。

### 【空知地区】

- ・南部では、育苗・移植期の作業・生育は遅れ、移植期は平年対比3日遅れとなったが、移植期以降は高温・多照傾向にあったことから活着は良好で、分けつ期以降、幼穂形成期・出穂期・登熟期にかけて順調に推移してきている。
- ・生育遅速は、黄熟期で平年より1日早く、早いほ場では9/10前後に成熟期に達することが見込まれる。
- ・不稔は平年よりやや少なく、稔実粒数は1㎡あたり、28,000~29,000粒程度と見込まれる。
- ・中央部（美唄・新十津川）の生育は、南部と同様の傾向であるが、出穂期で3日程度早い生育となっており、不稔歩合は平年よりかなり少なく、㎡当たりの籾数も平年並み以上が見込まれる。
- ・千粒重も平年以上が見込めそうであり、平年を上回る収量が期待できる状況である。
- ・成熟期（成苗なつぼし）はさらに早まり、9/5~6前後（早7日）が見込まれる。
- ・夜温が高く、乳白の発生が心配される。
- ・北部（深川・沼田）の生育についても、順調に登熟が進んでおり、茎数（穂数）も平年並以上に確保されており、不稔もかなり少なく、千粒重も高いと見込まれることから、平年以上の収量が期待できそうである。
- ・黄熟期で5日程度生育が早まっている。
- ・懸念としては、収穫適期を間近に控えているが、8月下旬に入ってからからの降雨でほ場がぬかるんでいることや、地域別・個人的に生育差が大きいことがあげられる。

### 【留萌地区】

- ・移植終が6月上旬になるなど、融雪遅れから作業・生育進度は遅れていたが、出穂期以降は平年より早まり（出穂揃で早3日）、病害の発生も少なく、不稔も5%以下と少ない見込みであるなど、順調に推移している。

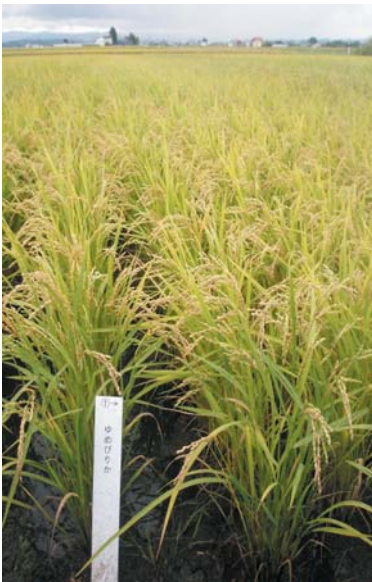


- ・ただし、穂数やもみ数はそれほど多くはなく、概ね平年並み程度の作柄と見込まれる。
- ・また、留萌地区では、従来の奨励ほ場の他、昨年度の北海道優良米生産出荷共励会で最優秀賞を受賞した中尾氏（留萌市）のほ場を視察させて頂きました。
- ・収穫間近のほ場を視察しながら、本年の作業・生育が融雪遅れの影響を受けたこと、研修会の講演で伺っていた水管理の苦勞についてのお話などを聞かせて頂きました。
- ・「(本年産米の) 茎数はやや物足りなく、収量は何とか平年並み程度。タンパクは止葉の色を見ると、まだ窒素を吸収していると思われるなど、心配な面が多く、まだわからない。当たり前のことに取り組んでおり、特に工夫らしい工夫もしていない」とのコメントでありましたが、暗渠の整備の他、側条施肥・ケイ酸資材散布など、様々な角度から良質米生産に取り組まれ、良好な生育にあるほ場を視察させて頂きました。

### 【上川地区】

- ・北部では、初期生育が良好であり、8/1の調査時点までは平年を上回る茎数が確保されてきたが、無効茎が多くなり、最終的な穂数・籾数は平年よりやや少なくなる見通しである。
- ・不稔は低く、登熟も順調に進んでいるが、8月下旬の寡照・降雨により、生育進度はやや停滞してきている。





- ・収量は、(見込みどおり平年を上回る)千粒重が確保されれば、平年並みに達すると見込まれる。
- ・本年の特徴としては、移植期が早いほ場ほど、茎数(穂数)が確保され、収量がある傾向にあるとのことで、上川農試でも同様の話があった。
- ・中央部(永山・東川)でも、生育が早く進み(出穂揃で早6~7日)、不稔も少なく、順調に生育しているが、茎数(穂数)や千粒重は平年並みかやや下回る状況であり、籾数も30,000粒/m<sup>2</sup>程度にとどまる(平年並みかやや少なめ)見込みであることから、最終的な収量は平年並みと見込んでいる。

- ・東川の一部ほ場では、8/27に刈取が開始されたが、中央部全体としては、9/5過ぎに刈取のピークとなる見込みである。
- ・南部でも、生育が早く推移し、一部では8月中の刈取が見込まれ、収量も稔実籾数が30,000粒/m<sup>2</sup>確保され、ほぼ平年並みの作柄が見込まれるが、遅れ穂が多く、穂揃いやほ場状態が悪いことから、実際の刈取作業は、やや遅れる見込みである。

## 2. 総合検討会における協議事項について

- (1) 両班による調査終了後、道農政部(上川農試在勤)竹内上席普及指導員を座長とする総合検討会を開催し、本調査のまとめと課題整理を行いました。
- (2) 各地区の作柄状況については上記のとおりであるが、全道的な傾向としては春先の低温で育苗や移植作業は遅れたものの、移植後は概ね順調に気象が推移したことから活着は良好であり、茎数・穂数も概ね確保されている。
- (3) 一方、無効茎が多く発生し、最終的な穂数が平年を下回る地区もあることや、穂長が短い、一穂もみ数が少ない地区もあることなどから、最終的なもみ数はそれほど多くないことが見込まれる。
- (4) ただし、不稔は全道的にかなり低いことが見込まれ、このことを勘案すると、全道的な収量については「平年並みかやや良い」見通しにあると纏められた。
- (5) 品質については、アミロース含有率は低いことが見込まれるものの、タンパク質含有率については、まだ窒素吸収をしている稲も見受けられることから高まる懸念があるなど、見通し難い面もあるが、(不稔が回避され、千粒重が確保されるなど)収量がある程度確保されれば、(窒素が分散し)それほど上昇しないのではないかという見解も示された。
- (6) 収穫時期までの留意事項として、本年

産では育苗期後半に気温が上昇したことから老化苗が多く発生し、早期異常出穂の発生ほ場も多かったことから、穂揃いが悪く、ばらつきの多いほ場が多くなっていることへの対策が必要である。

- (7) 本年産の収穫にあたっては、例年以上に収穫適期の判定は難しく、その期間も短いと考えられることから、今後、各地で行われる適期収穫判定の講習会を活用し、こ

まめに試し刈りを行い、収穫適期の見極めを行っていくことが必要との見解が示された。

- (8) 一方、8月中下旬以降の降雨・寡照により、土壌の乾燥が進まず、状態が悪いほ場が多いことから、適期収穫を行うためには、ほ場の排水を積極的に行う対策も必要との見解も頂いた。

以上

